



TITLE:

再生産の共通法則と経済的範疇

AUTHOR(S):

長砂, 実

CITATION:

長砂, 実. 再生産の共通法則と経済的範疇. 経済論叢 1958, 82(2): 133-146

ISSUE DATE:

1958-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/132632>

RIGHT:

經濟論叢

第八十二卷 第二號

日本經濟と纖維産業（特に綿業）植 場 鐵 三	1
排除説と補償説.....穂 積 文 雄	14
炭鉞国家管理における炭価・資材政策の検討岡 田 賢 一	29
再生産の共通法則と經濟的範疇.....長 砂 実	45
 書 評	
重農主義研究の問題点 ——横山正彦著『重農主義分析』批判——河 野 健 二	59

昭和三十三年八月

京都大學經濟學會

再生産の共通法則と経済的範疇

長 砂 実

一
生産手段の社会主義的な社会的所有にもとづいて計画的生産がおこなわれる社会主義経済制度が、生産手段の私的・資本主義的所有にもとづいて無政府的生産がおこなわれる資本主義経済制度にくらべてすぐれていることは、事実の問題として誰の目にもあきらかになりつつあるようにみえる。しかし、『経済学教科書』第三篇に代表される社会主義の経済学——社会主義的生産諸関係をその研究対象とする一つの狭義の経済学——が、社会主義経済制度のこのような優越性が生みだされてくる理論的根拠を、つまり資本主義経済制度とそれがいかに本質的、根本的に異なるかを、経済理論として説得的に展開している。かどうかにについては、かならずしも肯定的な答えをえられるとはかぎらない。社会主義の経済学のこのようなたちおくれについて

は、多くの原因をかぞえることができるであろう。だがそれらのうちでわたくしがもっとも重要だと思ふのは、社会主義の経済学がその発展史の最初から『資本論』に学ぼうとつとめているにもかかわらず、その学び方のなかに、いまなお重大な欠陥をもっている、ということである。このことは、第一に、これまでわれわれがもっている唯一の完成された狭義の経済学である『資本論』の論理体系、その基礎にある方法論は、新しいもう一つの狭義の経済学たらしとする社会主義の経済学にとってすぐれた模範をしめしているにもかかわらず、事実上このことが軽視されていること、第二に、『資本論』はたんに一つの狭義の経済学であるにとどまらないで、エンゲルスが強調したような——『経済学教科書』的なそれではない——広義の経済学をうちたてるためにきわめて貴重で豊富な理論的素材を提供しており、その素材を社会主義の経済学にのみ固有なものとして

いく理論的操作が可能であるばかりでなく重要な意義をもっていることがまだ十分に自覚されていないこと、にあらわれている。

社会主義の経済学のたちおくれをもたらししているこのような原因は、われわれのように資本主義社会にあって社会主義の経済学を研究しようとするものの恰好の研究対象とならなければならぬ。わたくしは、このような問題意識のもとに、社会主義の経済学の体系のうち、社会主義再生産論を、当面の検討の対象としてとりあげることになろうと思う。

社会主義の経済学のなかで再生産論はどのような理論的位置をあたえられているかといえ、それは第一に、『経済学教科書』第三篇の構成からもわかるように、事實上、社会主義の経済学の最後に展開されてそのしめくりの役割をはたすものとされており、第二に、国民経済計画として具体化される国民経済バランス作成の理論的、方法論的基礎であるとされている。

だから、再生産論のなかにこそ、わたくしがとりあげようとしている社会主義の経済学の諸問題が、とくに明瞭にあらわれるのである。社会主義再生産に固有な法則性が資本主義再生産のそれといかに本質的、根本的に異なるかを社会主義再生産論がもしわれわれの前に十分に展開してみせてくれるならば、われわれは、国民経済計画の作成とその遂行のなかに具体的に表現される社会主義経済制度の優越性がどこからでてくるかの理論

的根拠をつかむことができるであらう。これが、再生産論を検討の対象にとりあげるわたくしの理由である。

そして、以上の視角から社会主義再生産論を検討するさい、すくなくとも二つの側面から問題に接近することが必要である。その第一は、マルクスの再生産論と社会主義再生産論とのいわゆる「血統関係」、「継承性」(ストゥルミリン)の解明であり、その第二は、両者のいわば非血統関係、非継承性の解明である。第一の解明は第二の解明にとって不可欠の前提である。また、第一の解明は第二の解明にすすむことによってのみその意義があきらかとなる。だがこの二つの解明を同時に試みることは、この小論では不可能である。わたくしは、ここでは、第二の解明をつねに念頭におきながらも、第一の解明にのみたずさわることにしなければならない。いずれ第二の解明のための機会をもちたい。

二

さて、『経済学教科書』第三九章「社会主義的再生産」は、その冒頭において「マルクス・レーニン主義の再生産論の基本的な命題」なるものを六つかかげ、それらが「社会主義や共産主義のもとでも、完全に有効であり、社会主義の国民経済計画化にとってその適用は不可欠である、とのべている。いうまでもなく、この叙述は基本的にはスターリンの周知の指摘からも

つてこられたものであり、スターリン自身は、自分の主張をマルクス、エンゲルス、レーニンを引用することによって根拠づけた。スターリンは、さらにローザを引用することもできたであろう。

ところがこの叙述には重要な問題がふくまれている。マルクスとレーニンは、歴史的に規定された資本主義再生産の本質と形態、それに特有な法則性と矛盾を追求して資本主義の再生産論をうちたてたのであった。したがって、マルクスの再生産論の基本的諸命題がたんに資本主義再生産の特有法則を表現するだけでなく、あらゆる再生産の共通法則をも表現するものである、と主張するにはよほどの理論的根拠をなければならない。そのためには、マルクスやレーニンの断片的な指摘を引用するにとどまらないで、それらの指摘そのものを生みだした源泉をあきらかにしなければならぬ。だが、このもつとも肝心な点で、事実上空白のまま残されているのであり、これを埋めることが、すなわち「血統関係」を解明することにはかならない、とわたしは考える。

だからわれわれの問題は、マルクスの再生産論の基本的諸命題がなぜ社会主義再生産論のそれでもありうるのか、つまり共通諸命題でありうるのか、ということである。

いま、いくつかの基本的諸命題のうちで、それなくしては他の命題も再生産表式も成立しない二つの中心的な命題、すなわ

ち、社会的生産の二部門分割と社会的総生産物の価値構成とにかんする二命題だけをとりあげよう。それらを『資本論』のなかにみるならば、われわれは、それらがその内容において「資本主義的生産の固有の特質を反映しており」、その形態において「商品」資本主義的な価値的諸関係の形態」をとっており、かつしてそのままで共通命題とよぶことはできない、ということを見出す。スターリンは、この特有な「形態」だけをみてその共通な「基礎的内容」をみないことは再生産論について「なに一つ理解していないということの意味する」といったが、特有な内容が特有な形態で表現されるのは当然だとしても、特有な内容と「基礎的内容」とはどのような関係にあり、共通な「基礎的内容」がいかにして特有な形態で表現されるか、というところが問題である。これがあきらかにされなければ、基本的諸命題を共通諸命題とみなす根拠もあきらかにできない、といえるであろう。

そこで、マルクスはその再生産論の基本的諸命題を理論的にどのようにしてうちたてていったかを、『資本論』においてみるのが重要となる。マルクスがそれらをうちたててゐるには、「資本の直接的生産過程」と個別的資本の流通とを特徴づける、経済学のもつとも基礎的な諸範疇（および諸法則）の発見および定式化が先行しなければならなかった。マルクスが再生産の諸法則をあきらかにすることができたのは、このような理論的

な先行作業があったからにはほかならない。このことは、すでにふれた再生産論の主要な二命題の定式化の内容だけをみてもまったくあきらかである。つまり、マルクスにあっては、このようにして特有な内容と特有な形態とが統一されているのである。

だから、できあがった再生産論の基本的諸命題が共通な「基礎的内容」をふくんでいるものとして共通命題であるというならば、当然、それらの定式化のなかにはいりこんでいる諸範疇（および諸法則）の共通な「基礎的内容」を問題としないわけにはいかない。再生産論の基本的諸命題とは、再生産の客観的法則性の理論的表現、つまり再生産の経済法則である。そしていかなる経済法則も、経済的範疇（あるいはいつそう抽象的な諸連関を表現する法則）のたすけをかりなければ定式化することはできない。このことは、客観的現実の弁証法的発展そのものによって規定された、あらゆる科学の一般的方法である。

『資本論』は、このことをあますところなくしめしている。だから、われわれがマルクスの再生産論の基本的諸命題が共通命題、つまり再生産の共通法則でもあるということ、マルクス自身は自分の再生産論が「社会主義の生産にとっても効力をもちうる、ということから出発していた」ということを確信するためには、そのような基本的諸命題の定式化に役立った諸範疇（および諸法則）にそのことを可能にする契機、具体的には共通な基礎的内容が存在することをあきらかにしなければならな

い。マルクスの再生産論と社会主義再生産論（もつと一般的に資本主義の経済学と社会主義の経済学といってもよい）の継承性の問題は、まさにここにその核心がある。

わたくしは、このような目的をもった考察の対象となる経済的範疇として、使用価値と価値、有用の労働と抽象的労働、労働過程と価値増殖過程に包括されるもの、をとりあげることができる（そして、ある範疇の考察は同時にそれに照応する法則の考察でもある）。なぜこれらを取りあげるかといえば、これらがマルクスの再生産論のなかで大きな役割を演じているからである、まず使用価値は、いわゆる素材視点という形で、社会的生産物を現物（物的形態で考察してそれが二部門に分割されること、およびその「物象的諸成分」が「質料填補」されることをあきらかにするのに役立ち、価値は、いわゆる価値視点という形で、社会的総生産物が $c + v + m$ という三つの価値部から構成されること、およびその「価値諸成分」が「価値填補」されることをあきらかにするのに役立っている。また、有用の労働は、現物（物的形態で考察した社会的総生産物を生産する労働として、および消費された生産手段の価値を生産物に移譲し維持する労働として、抽象的労働は、価値を、とりわけ価値生産物をつくりだす労働として、それぞれ大きな役割を演じる。さらに、労働過程は、有用の労働が使用価値をつくり出す過程であって、生産の諸条件を、すなわち c と v の存在と両

者の相互関係との質料的基礎をあきらかにするのに役立つ。そして「生産の諸条件は同時に再生産の諸条件」である。最後に、価値増殖過程は、抽象的労働が価値および剰余価値を形成する過程であって、生産手段が価値を、商品としての労働力が価値および独自の使用価値をもつことから、社会的総生産物が「(一)不変資本、(二)可変資本、(三)剰余価値から成る」ことをあきらかにするのに役立つ。そして、この剰余価値こそ、「蓄積の実体」、「拡大再生産の現実的基礎」である。しかも、いうまでもないことだが、使用価値と価値は商品に内在する対立物であり、有用的労働と抽象的労働とは商品を生産する労働に内在する対立物であり、労働過程と価値増殖過程とは「資本制の生産過程・商品生産の資本制的形態」に内在する対立物である。それらはきりはなせない。だがこのことを十分に念頭におくならば、われわれはまずこれらを、使用価値—有用的労働—労働過程、価値—抽象的労働—価値増殖過程、の二系列にかけて考察することが許されるであろう。

はたして、これらの範疇は共通な「基礎的内容」をもっているであろうか、その共通内容はいかにして直接には特有内容においてあらわれるのであろうか。かくして、これらは直接には資本主義再生産の特有法則性を暴露するのに役立つながら、いかにして、再生産の共通法則性をもあきらかにするものたりえたのであろうか。

- (1) 『経済学教科書』増補改訂版、邦訳、合同出版社、九二〇ページ。

- (2) スターリン『ソ同盟における社会主義の経済的諸問題』邦訳、国民文庫、九三〇九七ページ。

- (3) ローズ『資本蓄積論』第四、五、七章。

- (4)(5)(6)(7) スターリン、前掲書、九四〇九六ページ。

- (8) マルクス『資本論』邦訳、青木書店、第一部、八八五ページ。

- (9) レーニン全集、第三巻、邦訳、青木書店、二八ページ。

三

まず、第一の系列、使用価値—有用的労働—労働過程を考察しよう。

マルクスはあらゆる構成体の社会的生産物に共通する使用価値の規定と、商品にのみ固有な使用価値の規定とをあたえている。前者は、「富の—その社会的形態がどうあろうとも—質料的内容をなす」使用価値であり、それは「なんらの社会的生産関係をも表現しない」。後者は「交換価値の質料的担い手」をなす使用価値、「他人のための使用価値」、「社会的な使用価値」であって、これは商品生産・価値関係をはなれては存在しない。簡明化のために、前者を自然的使用価値、後者を社会的使用価値とよぶなら、ついで問題となるのは、第一に両者の関係、第

二に後者そのものをいっそうたわいって規定することである。

第一に、商品の使用価値を自然的使用価値あるいは社会的使用価値のいずれか一方に還元してしまうのは誤りであろう。商品の使用価値は両者の統一において理解されなければならない。マルクスは、これら両者を同時に生産しないでは商品を生産できない、ということ述べている。だが、第二に、『社会的使用価値』それ自体と『商品の『社会的使用価値』』とは明確に区別しなければならない。なぜなら、社会的使用価値一般はあらゆる社会的生産物に固有であり、商品の社会的使用価値は一つの、『歴史的・独自の性格』をおびたそれであるからである。「他人のための」の「他人」は他の私的商品生産者を意味し、『社会的』の「社会」は私的商品生産者たちのそれを意味している。だから、『商品の『使用価値』』を性格づける『社会的使用価値』は、『あらゆる社会形態において実存する』『社会的使用価値』ではなくて、その『一定の・歴史的な・形態』としての、歴史的、独自の社会的使用価値である。

商品の使用価値は、マルクスによってこのように理解され、用いられている。そして、いかなる社会構成体の社会的生産物も、それが商品であろうとなかろうと、自然的使用価値とその構成体の基本的な生産関係に規定された独自の性格をおびた社会的使用価値との統一としてのその使用価値をもつであろう。

『商品の使用価値』は、だから、経済的範疇である。にもか

かわらず、そのうちには、自然的使用価値という、あらゆる社会的生産物に共通な基礎的内容をふくんでいる。そして、社会的生産の二部門分割と質料増補の考察は、直接的には、あきらかにこの自然的使用価値によって社会的生産物を生産手段と消費物資とに分割することから出発する。この意味で、『一生産物が商品として生産されるか否かを問わず、それはつねに、個人的または生産的消費に入りこむはずの富の質料的形態、使用価値である』、というマルクスの叙述は注目されねばならない。

二部門分割命題は、この意味で共通命題である。だが同時に、資本主義再生産における二部門分割と質料増補は、商品の使用価値の独自の社会的性格に表現されるような、自然発生的な社会的分業および無政府的な商品生産・流通という特有な現実的内容をもっていることを忘れてはならない。この意味では、二部門分割命題は、具体的にはその特有な内容と特有な形態との統一としてしかあらわれることはできないのである。

使用価値についてのべたことは、有用的労働を検討することによっていっそう明確になる。マルクスが、『人間のどんな社会形態とも係りない一生存条件であり、人間と自然との間の質料変換つまり人間の生活を媒介するための永久的な自然的必然である』としている「特殊な、合目的・生産的な、活動」つまり労働は、自然的使用価値を生産する有用的労働である。だが、有用的労働の規定をこれだけに限るのはあきらかに

誤りである。商品の使用価値を生産する有用の労働としては、それは右の規定と同時に、「自立的な生産者たちの私事として相互に独立して営まれる有用の諸労働」、「特殊な有用の私的労働」、「社会的に有用の性格」と「形態」とをもった「私的諸労働」、つまり商品生産に特有な性格と形態をもった「社会的分業」の諸環を形成する労働、といういっそう発展した特有な規定をうけとる。この二様の規定の統一が、商品の使用価値を生産する（そして消費された生産手段の価値を移転、維持する）有用の労働という経済的範疇である。

ところで社会的分業なるものは、商品生産の「実存条件」であり「一般的基礎」ではあるけれども、「一社会全体における分業は、商品交換によって媒介されているか否かは別として極めて種々様々の経済的社会構造に見られるのである」¹⁶⁾。しかもそのそれぞれが、独自の社会的性格と形態をもつ。そしてこのことは、有用の労働の特有な社会的規定を生みださないわけにはいかない。だから、いかなる社会構成体のもとでも、有用の労働は二重の規定の統一として、すなわち経済的範疇としてあらわれる。このことが、すでに使用価値についてのべたことと完全に照応することはあきらかである。

つぎに労働過程を問題にしよう。マルクスは、労働過程を、客観的・生産諸条件・対象的要因である生産手段（労働対象と労働手段）と主観的・生産条件・主体的要因である合目的に労働

される労働力という、使用価値として「概念上厳密にことなつたふたつの契機と対立物」¹⁷⁾においてとらえている。そして、このような「簡單で抽象的な諸契機において」とらえられる労働過程は、「人間生活の永遠的な自然条件」、「人間生活のすべての社会形態に等しく共通したもの」である。だからこのような観点からみられる労働過程は、「労働過程そのもの」、「労働過程一般」つまり自然的労働過程とよぶことができる。ついでに言えば、社会的「労働の生産性増加を表現する」ところの「労働過程の客体的諸要因とくらべての主体的要因の量的減少」は、「いかなる社会的条件のもとで生産が行われるかに係りなく」貫徹する「法則」である、¹⁸⁾、ということは、この自然的労働過程の問題である。

だが、このような自然的労働過程のそれぞれの契機も、それらの連関も、その生産物も、「一定の歴史的発展段階において……特殊な社会的性格」¹⁷⁾をもち、全体として「独自の現象を呈する」¹⁸⁾ことを見逃してはならない。マルクスは「労働過程そのもの」と「資本の労働過程」との「特殊な差異」を強調し、労働過程の諸要素を、直接には、「資本が使用価値として……とるすがた」¹⁹⁾として考察した。

労働過程は、具体的には、つねに自然的労働過程となんらか一つの特有な社会的労働過程との統一であり、この意味で一つの経済的範疇である。こうして、われわれは、労働過程という

範疇が自然的労働過程という共通な基礎的内容をもっていること、そしてこの共通内容こそが生産の、したがって再生産の一般的諸条件、および第一部門の優先的發展の一般的根拠をあきらかにするものであることを理解できるのである。と同時に、われわれは、資本制生産過程の一要因としての「資本の労働過程」に特有な内容が、この一般的諸条件と一般的基礎にどのような独自の性格をあたえるか、ということをも判断することができる。

以上の第一系列の諸範疇の考察を通じてあきらかになったことは、それらが共通な基礎的内容と特有内容との統一として経済的範疇であるということ、このようなものとして、それらはまずなによりも資本主義に特有な再生産法則を、そしてその共通な基礎的内容のために同時に共通な再生産法則——基本的には、社会的生産の二部門分割と資料填補、および第一部門の優先的發展——をあきらかにするのに役立つことができたということである。マルクスの再生産論に共通な基礎的内容と共通命題が存在するか、それらは資本主義に特有な内容および形態といかなる関連にあるか、という問題は、理論的にここまで掘りさげる必要があるのである。

- (1) マルクス『資本論』邦訳、青木書店、第一部二一五ページ。

- (2) マルクス『経済学批判』邦訳、国民文庫、一五ページ。

- (3) マルクス『資本論』同右、一二三、一九二〜三ページ。

- (4) 同右、一二二〜三ページ。

- (5) マルクス「アドルフ・ヴァグネルの『経済学教科書』への評註」邦訳、『資本論』、日本評論社旧版、第一巻、下、一二九七ページ。

- (6) 同右、同ページ。

- (7) 同右、一三〇四ページ。

- (8) マルクス『資本論』邦訳、青木書店、第一部一七五ページ。

- (9) 同右、第一部一二五ページ。

- (10) 同右、第一部一二五、一七四、二二三ページ。

- (11) 同右、第一部一二四、五八四ページ。

- (12) 同右、第一部五九五〜六ページ。

- (13) マルクス『直接的生産過程の諸結果』邦訳、選集大月書店、第九巻下、三六六ページ。

- (14) マルクス『資本論』同右、第一部三三九ページ。

- (15) マルクス『直接的生産過程の諸結果』同右、三六七、三八八ページ。

- (16) マルクス『資本論』同右、第一部九六六、九九七、第三部三七七ページ。

- (17) マルクス『直接的生産過程の諸結果』同右、三八七ページ。

(18) マルクス『資本論』同右、第一部三四〇ページ。

(19) マルクス『直接的生産過程の諸結果』同右、三六七〜八ページ。

四

つぎに、第二の系列、価値―抽象的労働―価値増殖過程を考察しよう。

周知のように、諸商品はそれらに共通な抽象的労働という社会的実体の結晶として諸価値であり、その価値の大きさは社会的に必要な労働時間によって規定される。そして、経済学が問題にする価値は、「特定の社会形態のなかで適用している価値」、具体的には私的諸労働が生みだす「諸商品の価値」であって、「商品価値」は商品生産関係だけが生みだす経済的範疇である。だが、たちいて考察すれば、この商品価値範疇のなかにも、われわれは共通な基礎的内容をみいだす。すなわち、マルクスは物神崇拜を論じた節で、「価値諸規定の内容」として、第一に人間労働力の支出、第二にこの「支出の時間的継続」、「労働時間」、第三に労働の「社会的形態」、という三つをあげたが、これら三つの内容があらゆる社会に客観的に存在することはあきらかである。さらに、マルクスが同節で、ロビンソンの生活、中世の賦役労働、家父長制的労働、共産主義的団体などにおける労働時間を問題にして、ロビンソンの生活に「価値のいっさ

いの本質的な諸規定」をみいだし、共産主義的団体におなじ規定が妥当することをのべている。場合、また第三巻で、「資本制の生産様式の止揚後も、社会的生産が維持されておれば、価値規定は、……労働時間の規制、および相異なる諸生産群の間での社会的労働の配分、最後にはこれらに関する簿記が、従来よりも重要となるという意味で、依然として重きをなす」とのべている場合（エンゲルスも、「経済学の価値概念のうち共産主義社会にのこる」ものを問題にした）、また、かの有名な手紙のなかで、社会的労働の比例的配分にかんする「自然法則」についてのべている場合、かれは異なった表現で「価値諸規定の内容」についてのべている、ということができる。そしてこの「価値諸規定の内容」は、マルクスの別の表現をかりれば、「人間自身の労働の社会的性格」であり、「異なった形態においてにはせよ凡ゆる……歴史的社會形態において同様に実存する」ところの、「社会的労働力の支出として実存するかぎりでの労働の社会的性格」であって、「商品の『価値』なるものは、これを「歴史的に發展せる一形態において表現する」ものにすぎない。以上によって商品価値範疇のなかに共通な基礎的内容がふくまれていることはあきらかである。

だが、この共通な基礎的内容がそのままで価値という形態をとるかのように考えるのは誤りであろう。そうするためには、それが商品生産関係に特有な内容に、つまり「商品を生産する

労働の独自の・社会的性格⁹⁾に転化しなければならない。この転化にさいしては、社会的労働が、「相互に独立して管まれる、しかし社会的分業の自然発生的な諸要素として相互に全面的に依存しあっている・私的諸労働¹⁰⁾」という商品生産社会に特有な「社会的規定」をうけとることが、決定的な役割を演じる。かくして、価値諸規定の第一の内容は抽象的労働に、第二の内容は社会的に必要な労働時間に、第三の内容は「私的諸労働の社会的連関」に、つまり全体として価値の内容に転化し、ここからさらに「労働諸生産物の」、「価値対象性」あるいは「価値性格」という形態、「価値の大きさという形態」、「社会的関係という形態」が生みだされて、ここにはじめて、価値という「歴史的に発展せる一形態」つまり経済的範疇が成立する。そして、このことは、「商品生産というこの特殊の生産形態にのみ妥当すること¹¹⁾」であって、共通な基礎的内容がいかにして、価値、抽象的労働、社会的に必要な労働時間などの商品生産範疇になつていくかの特有な道筋なのである。けれども、わたくしは、基本的に商品生産が存在しない社会構成体においてもそれに固有な独自の・社会的性格を社会的労働がもつことから、この共通な基礎的内容が特有内容に転化し、それを表現する特有な諸形態としてその構成体に固有な経済的諸範疇が——共通な基礎的内容のために形態的には商品生産諸範疇に類似した——成立する必然性が存在すると考える。このことは、第二の解明にお

いて重要である。

ともあれ、以上の考察は、商品価値範疇（そのなかには抽象的労働範疇がふくまれる）に共通な基礎的内容が存在することをあきらかにした。このことは、とりもなおさず、社会的総生産物の三価値構成、価値填補にかんする再生産の法則を——マルクスにあっては、それは直接に資本の再生産の法則として解明されたにもかかわらず——なぜ再生産の共通法則ともみなすことができるか、ということの秘密をあきらかにするものである。

つづいて、価値増殖過程の考察に進もう。価値増殖過程を特徴づける主要な範疇である、剰余価値、商品としての労働力、不変資本と可変資本に検討の範囲を限ることにする。

剰余価値とは「剰余労働時間の凝結」、「対象化された剰余労働¹²⁾」であるから、ここでの問題は剰余労働である。周知のように、あらゆる搾取社会に剰余労働は固有であり、それらを区別するのは「この剰余労働が……紋取り取られる形態に他なら¹³⁾」ない。しかし、剰余労働の存在を搾取社会にだけ限ることは誤りである。マルクスやエンゲルスは、いくども、剰余労働が「資本制生産様式の止揚後も存続」することを確認し、そのような剰余労働として、「保険元本」、「社会的な予備元本」、「蓄積元本」などを形成する労働、および、まだ労働しえないかもしや労働しえない社会成員のためにつねに為さねばならぬ労働分

量」をあげている。だから、剰余労働は、「労働の特定程度の生産性」を前提するとはいへ、独自の性格と形態をとってあらゆる構成体に存在する、したがってまた、社会的総労働日はつねに必要労働と剰余労働とからなる、といわなければならない。「必要労働ならびに剰余労働から、独自の・資本制的性格をとり去ってみよ。すると、なお残るのは、これらの形態ではなくて、すべての社会的生産様式に共通な、これらの形態の基礎だけである。」¹⁴⁹こうして、われわれは、生産物価値、価値生産物の不可分の一部分であり、蓄積の実体である、剰余価値という経済的範疇が、すでに価値についてのべたことを別としても、共通な基礎的内容をもっていることを確認したわけである。

つぎに考察しなければならないのは、剰余価値の源泉として価値増殖過程で「決定的な」役割を演じる「商品としての労働力」、とくにその「独自の使用価値」である。わたくしは、剰余労働があらゆる社会構成体に存在し、それが労働力の発現の一部分であるところから、この独自の使用価値についてつぎのように考える。すなわち、労働力はそれが商品であるといなどにかかわらず、労働そのものという自然的・使用価値のほか、剰余労働を提供するといういわば特殊な社会的・使用価値をもっているであって、商品としての労働力の独自の使用価値とは、これが資本制的生産関係に固有な独自性をもって現象したものにほかならない。必要労働一般と剰余労働一般との存在は、商

品としての労働力の価値および独自の使用価値のなかに、労働力一般に通ずる共通規定性をみいだすことを、われわれに要求しているのである。

最後に、不変資本と可変資本であるが、ここでは、つぎのとだけに注意することにしよう。それは、「蓄積された労働」としての生産手段は、「歴史的に発展した一定の諸条件のもとでのみ」不変資本という「独自の社会的性格」、独自の「社会的な形態規定性」をうけとること、および、「可変資本は、労働者が彼の自己維持および再生産に要する・そして彼があらゆる社会的生産体制のもとで常にみずから生産し再生産せねばならぬ・生活手段の元本または労働元本の、特殊な歴史的現象形態にすぎない」ということである。だから、「生産の社会的形態がどうあるうとも」存在する生産の二要因の「結合がなされる仕方様式の特種性」によって、社会構造の種々なる経済的時代が区別される」¹⁵⁰のであるが、この特殊性は、主要因がその時代にうけとる特有な「社会的規定性……(範疇的規定性)」¹⁵¹にこそ表現される、といわなければならない。つまり、生産の二要因は、つねに、特定の生産関係を表現する経済的範疇とならないわけにはいかない。しかも、そのさい、生産物価値形成における異なった役割からくる「不変」「可変」の資本の区別は、たとえそれがよくむ階級的・社会的內容が本質的に異なるとしても、つねに存在するであらう。われわれは、こうして、不変資

本 $c + v$ 可変資本 $v + m$ 剰余価値 m という資本制の社会的生産物の価値構成にもとづくマルクスの再生産論が、なぜ再生産の共通法則をもあきらかにしえたか、の根拠をみいだすのである。

以上での第二系列の諸範疇の検討をつうじてあきらかになったことは、それらが商品・資本制生産関係を表現するその特有な内容と形態とのうちに共通な基礎的内容をもっていることであつた。そしてこのことこそ、マルクスが直接には資本主義的再生産に特有な法則として考察したものが、同時に再生産の共通法則をもしめすものである——ここで問題にしているのは、社会的総生産物の価値構成、価値填補、および蓄積と拡大再生産の源泉にかんする諸命題である——ということのできる理論的根拠なのである。

- (1) エンゲルス『反デューリング論』邦訳、大月書店新訳研究版、二二〇～二二一ページ。
- (2) マルクス『資本論』邦訳、青木書店、第一部一七一ページ。
- (3) 同右、第一部一七八～一八二ページ。
- (4) 同右、第三部一二〇〇ページ。
- (5) エンゲルス『反デューリング論』同右、三三六ページ。
- (6) マルクス『クーゲルマンへの手紙』、マルクス・エンゲルス二巻選集、大月書店、第二卷三六一ページ。
- (7) マルクス『資本論』同右、第一部一七二ページ。

(8) マルクス『アドルフ・ヴァグネルの『経済学教科書』への評註』前出、一三〇四ページ。

(9) マルクス『資本論』、第一部一七三ページ。

(10) 同右、第一部一七六ページ。

(11) 同右、第一部第一章第四節。

(12) 同右、第一部一七五ページ。

(13) 同右、第一部三八五ページ。

(14) 同右、同ページ。

(15) 同右、第一部八三二ページ、第二部一一五四、一一九四、一二三三～四、一二三五～六ページ。『反デューリング論』前出、二一六～七ページ。ほかにエンゲルス『哲学の貧困』序文。

(16) マルクス『資本論』同右、第三部一二三四ページ。

(17) 同右、第一部五三三ページ。

(18) 同右、第一部八八七～八八ページ。

(19) 同右、第一部五二二ページ。

(20) マルクス『剰余価値学説史』邦訳、青木書店、第一分冊五九八ページ。

五

残された問題は、以上で二つの系列に分けて考察した諸範疇を、本来のその統一において考察することである。そして、こ

ここでは当然、矛盾が問題となる。周知のように、マルクスは、相互に対立物である上記の諸範疇のあいだの内在的矛盾を重視し、その矛盾の発展と解決のたえまない過程として、資本制生産の歴史的・論理的発展を考えた。その内在的矛盾の追求は、もともと端初的には労働の二重性¹二者闘争的性格から出発して、資本主義のもとでの生産力と生産関係のあいだの敵対的矛盾、資本主義の基本的矛盾にまでおよんでいる。では、われわれのこれまでの考察は、このこととどんな関係にあるであろうか。わたくしは、諸範疇のなかに共通な基礎的内容をみいだし、それが特定の構成体のもとでその基本的な生産関係を表現する範疇として生成していく一般のメカニズムにふれた。このように生成する諸範疇は、やはり、相互に対立物として連関・前提・排除しあいながら、そこでの社会的生産物、それにふくまれる労働、その社会的生産過程において、統一をなすであろう。いかなる狭義の経済学も、対立物の統一と闘争という弁証法の基本法則を、その体系のなかで無視することはできない。そして経済学の場合、この法則は、いかなる社会的労働も、「労働の如何にしておよび如何なるということ」——労働の質——と、「労働のどれだけということ」——労働の量——という二側面の統一であること、および、いかなる社会的生産においても「人間は自然にはたきかけるばかりでなく、また相互にはたきかける」ということを、そのもつとも基礎的な出発点とす

る、といえるであろう。だから、矛盾が存在するかしないかという設問はありえないのであって、問題は、特定の生産関係のもとで矛盾がもたないわけにはいかない特有な社会的性格である。そして、われわれが検討した諸範疇がふくんでいる共通内容は矛盾一般と関連し、特有内容は資本主義に特有な社会的性格をおびた矛盾と関連する、といえるであろう。しかも、「諸矛盾は客観的経済諸法則の『定在形態』であり、実現形態である」とするならば、この矛盾一般は再生産の共通法則の実現形態であり、資本主義に特有な社会的性格をおびた矛盾は、資本主義再生産に特有な法則の実現形態である、といえるであろう。ところが、現実には、経済的諸範疇が共通な基礎的内容だけによつては範疇であることはできず、また矛盾一般は、なんらかの特有な社会的性格をおびた矛盾を通じてしか現象することができないのとおなじように、再生産の共通法則とは、それ自体ではいわずに一つの抽象であつて、特定の歴史的諸条件によつて規定された再生産の特有な法則を通じてしか、それは貫徹することはできない。このことは、第一部門の優先的發展の法則、社会的總生産物の各部分の資料填補と価値填補の、一定の必然的な連関（『法則』）といつても、たとえば資本主義と社会主義のもとで、それらがいかに異なった社会的性格をもった特有な法則として現象しないわけにはいかないか、ということのなかに

こうして、われわれは、これまでに考察した諸範疇をその統一において考察しても、依然として、その共通な基礎的内容は再生産の共通法則に、その特有な内容が資本主義再生産に特有な法則に關連する、ということを確認することができるのである。

(1) マルクス「資本論」邦訳、青木書店、第一部一二九～三〇ページより。

(2) マルクス『賃労働と資本』邦訳、マルクス・エンゲルス二巻選集、大月書店、第一卷六七ページ。

(3) M. M. Posenatal, «Вопрос материализма в "Капитале" Маркса», Исследования, 1955, стр. 204, (邦訳「資本論の弁証法」青木書店上、二三五ページ)。

六

以上で、資本主義的再生産に特有な法則と再生産の共通法則

との關連を、前者を構成する経済的諸範疇の検討を通じて説明することによって、マルクスの再生産論から社会主義再生産論がなにをどのようにうけつぐことができるかという問題、つまり阿者の「血統關係」を基本的にあきらかにすることができたと考える。この解明は、社会主義再生産論とマルクスの再生産論との非血統關係を説明するための不可欠の前提であることは、まえにのべた。なぜそうであるかは、この第二の解明自体が、きらかにするであろう。だが、わたくしは、この小論のなかで、第二の解明がとりくまなければならない課題を、きわめて抽象的、萌芽的な形においてはあったが、意識的に提起してきた積りである。わたくしは、この課題を、つぎに予定している小論、「社会主義再生産の特有法則と経済的範疇」で果したいと思う。